

## 『線香花火のような人生』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

新しい年が始まったところで久しいが、原稿執筆のタイミングが年始であったので、つい2週間前に見た景色から述べる。

そもそもキリスト教の祭事・クリスマスは、仏教国・日本でも最大の商機であるゆえ、全国の繁華街が最も浮足立つ時期である。

そこで小生、毎週前半は名古屋か札幌に出向いているが、昨年は12月25日に名古屋の定宿・マリオットホテルでクリスマスの夜を過ごした。

駅上でオフィスやショッピングモール、百貨店が隣接する機能的で華やかなタワービルディングは、東海地区内で一人勝ちエリアであるが、それにして12月25日夜から26日朝への街の姿が凄すぎることをあらためて実感した。

毎年感じることはあるが、12月25日の夜には徹夜で働く人が大勢いるのである。クリスマスツリーは跡形もなく片付けられ、お正月に向かっている飾り付けへと変化している。昨日までのバックグラウンドミュージックであったクリスマスソングは罪悪のようになく流れず、お正月の楽曲で人々の気分を変えていく。

そこで表参道は勿論のこと、日本中の繁華街で見られる、この急速なお色直しは、節目が好きな国民性を如実に

表しているところであろう。

30歳代にシカゴで2回年を越したが、クリスマスイブは意外にも静かであった。そして12月26日から本格的なクリスマスセールが始まり、シングルベルやホワイトクリスマスが流れる中を、翌年のプレゼント用に、値下げされた包装紙を買い求める人々の列を目にした。そう言えば、クリスマスカードの文言も「メリークリスマス&ハッピーニューイヤー」で連続的な流れというわけだ。

そして欧米では、気が付くと自身の誕生日である1月17日ぐらいに自然とクリスマスツリーが片付けられていく。小生は今年、還暦を迎える。老け込んでいくのが嫌なので、あまり人生の節目と考へたくないが、この歳末と歳始が交差する暦を60回も迎えてきたかと思うと、それなりに感慨も希望も湧いてくる。

そこで最近の週刊誌で拝読した、いしだあゆみさんのインタビュ記事の一節に、しんみりとしたので紹介する。「目下の夢は線香花火のように生きること。最初は静かに、徐々に激しく情熱的に弾け、最後の赤い玉が落ちるかなと思いきや、なかなか落ちないという(笑)。ご縁のある仕事に全身全霊を傾けながら、命ある限り女優でいたいと思っっています」

(笑)は、インタビュアーか編集者が増えたものであろうが、こういう素敵な人生観を語るのは、流石に一流の表現者ならではのと感じた。

超高齢社会の日本。誰もが、この線香花火の如く、いつまでも陽気な時には弾けていたし、疲れても燃え尽きずに、しぶとく火を灯していたいと考えることである。

クリスマスや年明けカウントダウンには、世界中の何処でも打ち上げ花火が似合うわけだが、線香花火って外国には存在するのであるか? 日本っぽくて素敵だ。

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所(名古屋分院) <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所(札幌分院) <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

